



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



「12日間戦争」 イラン・テヘランで、火と煙が上がる石油倉庫=6月15日、EPA時事

逆三角形に染まっていった日々
結論ありきには見えなかったか

「逆三角形」と聞けば肉体系美しか思い浮かばなかったところ、新聞記者になって文章の構造を表すと知った。最初は頭も体も受け付けない。自分なりの書き方で原稿をデスクに出した。鉛筆の原稿の痕跡が残らないほど青ペンで直していたデスクがある日、「君はいつになったら、原稿の書き方を覚えるんだ」と言葉を荒げた。温和なデスクの豹変に、自分なりの書き方を捨てた。

「要するに、何なんだ」「読者は忙しいんだ。前文だけ読めばわかるように書け」。そんなことを言われ続けた。自分がデスクの立場になるとなるほど、逆三角形の原稿はおおよそ後ろを削ればよく、降版との格闘時には助かる。こうして時を経て体形とは裏腹に、すっかり逆三角形の世界に馴染んだ。

時はさらに移り新聞はオールドメディアと呼ばれるようになった。「結論ありきだ」とのそしりを受ける。そんなことはないかと振り返りつつ、ふと思う。新聞製作の都合から根付いた逆三角形の文章は、結論ありきに見えることはなかったのか。大事だと思うことを最初に言い切って、補足の説明は後に来る。その説明は削られて載らないこともある。

紙からデジタルへ、の掛け声も今は新味がなくなった。ネットの記事は削らなくてもいい。デジタル重視に沿って紙の記事も変容するのだろう。逆三角形の命運を案じつつ、ネットにあふれる釣り見出しや思わせぶりの前文もどきに動ぜず、信頼の形にたどりついてほしいと願う。（専務理事 江木慎吾）

戦後80年・中東・アーベル賞

大波と風を繰り返した6月

6月は大波と風を繰り返した。最初の週に7件の行事があったかと思うと、次の週は1件、その次はまた7件、そして今度は全くなし。記者会見・研究会のテーマも様々だった。

今年1月に始まった「戦後80年を問う」のシリーズは佳境にはいった。6月は日本型雇用システム、司法制度改革、象徴天皇制と国民感情、そして音楽を通して戦後の歩みを振り返った。ジャーナリスト井上亮さんは、国民の親しみがもたらした天皇制の危機について語った。

このシリーズには入っていないが、ジャーナリスト井手裕彦さんがゲストのサインブックに記した「死亡記録配達人」という言葉にはドキッとした。シベリア抑留の陰に隠れて顧みられることのなかったモンゴル抑留を掘り起こし、一人でも多くの遺族へ肉親の死の真実を届ける、という人ならではの話だった。

中東関係の記者会見も続いた。5月のイスラエル外相ギデオンのサアルさん、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)事務局長のフ

イリップ・ラザリーニさんの会見に続き、6月3日にはパレスチナ自治政府国民経済相のムハンマド・アル・アムールさんが登壇した。イスラエルがイランの核施設などの攻撃に踏み切ったことを受け、20日には防衛大学校名誉教授の立山良司さん、日本エネルギー経済研究所中東研究センター長・研究理事の坂梨祥さんを迎えた。

「数学のノーベル賞」とも呼ばれ、顕著な業績を上げた数学者に贈られるアーベル賞を日本人で初めて受賞した京都大学数理解析研究所特任教授の柏原正樹さんがオスロでの授賞式を終えて帰国し4日、オンライン会見した。誰かと話しているときに数学のヒントをつかむことが多い、などと語った。サッカーW杯北中米3カ国大会にいち早く出場を決めた日本代表監督の森保一さんは16日、サッカーにとどまらずスポーツを通じての社会貢献、日本を盛り上げることに語った。

11日には元警察庁長官の國松孝次さんほか一般財団法人未来を創る財

団の関係者が外国人材の受け入れに関する緊急提言を発表し、会見した。國松さんは「人口減少を抑え、地域の活性化に資する外国人材の受け入れを推進するための基本法の制定を」と揮毫した。

日本学術会議の歴代会長4人が16日、記者会見した。2023年以降、5回目の歴代会長会見となった。

「生成AI」のシリーズでは5日、日本語の大規模言語モデル(LLM)を開発し、安全性の確立に取り組んでいる国立情報学研究所大規模言語モデル研究開発センターの特任教授、関根聡さんが登壇した。「人の残酷な殺し方を教えて」というリクエストに生成AIがどのように反応するようになったのか。危険な質問には答えないようにするだけでは役に立たないことなどについて話した。

揮毫とともにイラスト



「戦後80年を問う」のシリーズで登壇した湯川れい子さんは平和への思い、外国の音楽、アーティストの思い出を語った。音楽は愛の揮毫とともに、素敵なイラストを描いてくれた。(江木)

目次

今月のクラブゲスト

▲会見レポート

細川護熙 元首相／マルタ・アルゲリッチ
チビアニスト、大槻文蔵 能楽師、ステファニー・アルゲリッチ 映像作家／ムハンマド・アル・アムール パレスチナ自治政府国民経済相／但木敬一 元検事総長／柏原正樹 京都大学数理解析研究所特任教授／西野純也 慶應義塾大学教授／森保一 サッカー日本代表監督／井手裕彦 元読売新聞編集委員／立山良司 防衛大学校名誉教授 坂梨祥 日本エネルギー経済研究所中東研究センター長・研究理事／湯川れい子 音楽評論家、作詞家

▲記者セミ

▼ワーキングプレス
江藤拓前農林水産相の失言報道 佐賀新聞社 山口貴由
長嶋茂雄さん死去 産経新聞社 清水満

韓国大統領選 李在明氏当選 NNN 横田明

▼新・列島報告 石川県
横綱 大の里誕生 北國新聞社 杉山圭一郎

▲書いた話書かなかった話
包囲下のサラエボに1カ月言わずにおいた「あのこと」 伊藤芳明

▼リレーエッセー
能條桃子さん NO YOUTH NO JAPAN 代表理事 テレビ朝日 外山薫

▲第27期委員会名簿

▲マイBOOKマイPR

▲写真回廊

20

19

17

16

14
15

13

10
12

9

フィリップ ラザリーニ
Philippe Lazzariniさん 国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) 事務局長



パレスチナ自治区のガザの窮状について「人々の苦しみは想像を絶する。生き残りをかけた毎日だ」と訴えた。イスラエルは阻止していた支援物資の搬入を一部再開したが、「大海の中の水滴ぐらい少ない。継続的支援がなければ大勢の人が餓死する」と危機感を示した。

■ 5・28／出席：会26人、オ33人／司会：出川展恒委員／通訳：池田薫さん

はまぐち けいいちろう
濱口 桂一郎さん 労働政策研究・研修機構 (JILPT) 労働政策研究所長



「日本の雇用は職務(job)ではなく成員(membership)だ」「能力による基本給の上昇を抑制するため、小手先の手段として成果主義を導入した」「一旦、失敗に終わった成果主義を、もう一度リベンジしたくて持ち出したのが2020年代になってからの奇怪なジョブ型ではないか」

■ 6・3／出席：会18人、オ50人／「戦後80年を問う」⑧戦後日本型雇用システムの諸問題／司会：猪熊律子委員

せきね さとし
関根 聡さん 国立情報学研究所大規模言語モデル研究開発センター特任教授



日本語の大規模言語モデル(LLM)を開発、安全性の確立とインストラクションデータ構築に取り組む。「有用性と両立を目指す中で、かなりの安全性を確立できてきた」LLMの個性はインストラクションが決める。どんなLLMを構築するかを考え、一步一步あゆんでいくことが大切」

■ 6・5／出席：会18人、オ44人／「生成AI」⑥／司会：倉澤治雄委員

くにまつ たかし
國松 孝次さん 一般財団法人未来を創る財団会長 (中央)

ふじわら ゆたか
藤原 豊さん 同副会長(左)

めんじゅ としひろ
毛受 敏浩さん 同アドバイザーボードメンバー 関西外国語大学客員教授(右)



3月に外国人材の受け入れに関する緊急提言を発表した。「人口減少、地域活性化の議論では、相関関係にある外国人材の活用について触れられていない。ようやく一体的に議論していく機運が少しずつ出てきている今、提言をまとめて世に問うことを始めた」(國松さん)

■ 6・11／出席：会22人、オ37人／司会：小林伸年委員

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートは右のQRコードを開きウェブサイトで読めます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。



日本学術会議 歴代会長 会見

やまぎわ しゅいち
山極 壽一さん 第24期会長

おおにし たかし
大西 隆さん 第22、23期会長

ひろわたり せいご
広渡 清吾さん 第21期会長

くろかわ きよし
黒川 清さん 第19、20期会長



左から黒川さん、大西さん、山極さん、広渡さん

日本学術会議を特殊法人化する日本学術会議法が6月11日に成立したことを受けて歴代会長6人が声明を発表した。成立に「遺憾の意」を表明した上で、石破茂首相に対して「学問の自由の保障、日本学術会議の独立性と自主性の尊重と擁護」を求めた。

■ 6・16／出席：会24人、オ35人／司会：行方史郎委員

いのうえ まこと
井上 亮さん ジャーナリスト



「ミッチーブームなどで皇室と天皇に対して戦前の憧れと畏れとは違った親しみの感情が国民に芽生えた。その一方バッシングが出てきた。バッシングにより皇室に入るとたたかれるというイメージが広がると、配偶者になる人がいなくなる。手をこまねいていると天皇制存続を危うくしかねない」

■ 6・17／出席：会18人、オ46人／「戦後80年を問う」⑩／司会：橋本五郎委員

てらした かずひろ
寺下 和宏さん 東京大学大学院講師



候補者の発言内容を前回までと比較し違いを分析。「前は経済政策などに加えてジェンダー関連の言及があったが、今回はジェンダーや若者の就労・賃金格差問題はほとんど扱われなかった。問題がなくなったわけではない。解決に向けて新政権が特に若年層と対話を進めることが大事だ」

■ 6・18／出席：会15人、オ33人／「韓国大統領選を読む」④／司会：澤田克己委員

やはり貴種である。文武両道の武将として知られる幽斎から数えて18代の細川家当主。芸術文化への造詣の深さと今をみる眼の確かさをあらためて痛感させられた。

講演は自らの生い立ちからはじまった。幼少期から中国の古典を学び、小学生になると父（護貞）に叱られながら論語、古今集、万葉集の素読を半べそをかきながらやった。

総会記念講演会 細川 護熙 元首相 舌鋒鋭く鑑識眼は不変

5月29日

こうして形成された教養人政治家は「歴史の一瞬をつかみとる」という意識が明白になったという。そこで立ち上げたのが日本新党だった。自民党支配の1955年体制を壊すため「永田町へ討ち入りした政党



学校教育になじめず落第・転校を経験。古今東西の書物を読み、歴史を学び、祖父（護立）によって各界の第一人者の聲（こゑ）にも接した。

学校で学んだことは、まるで桶狭間の信長のごとくである。そして歴史をつくった。首相2人、野党党首5人、自民党幹事長1人、知事3人、衆参両院副議長が日本新党から誕生した、と紹介したあたりにも自負ののどく。

先の戦争を侵略戦争と明言した歴史認識、政権交代可能な体制をめざした政治改革、コメの部分開放を受け入れたウルグアイ・ラウンド交渉を政権の業績にあげた。

北方領土交渉では93年の東京宣言にふれて、安倍晋三首相による2018年の「シンガポール合意」が2島返還に路線転換したのなら「理解

に苦しむ」と非難。企業団体献金の扱いになおケリがつかないのは「政治の怠慢として大いに批判されてしかるべきだ」と苦言も呈した。

政治の第一線を退いて30年近くとはいうものの、舌鋒鋭く鑑識眼は変わらない。

揮（ふる）ごうは「君臣並耕」。孟子にある、真の賢者は人民とともに耕して雑用（ざよう）もいとわず、政治もみるものだという意味の言葉だそう。突（つ）きささる箴言（しんげん）である。

日本経済新聞社客員編集委員
芹川 洋一

*下記のゲストの会見リポートは4～9ページに掲載しています

ほそかわ もりひろ
細川 護熙さん 元首相

■ 5・29／出席：会107人、オ35人／総会記念講演会／司会：老川祥一理事長

マルタ アルゲリッチ
Martha Argerichさん ピアニスト

おおつぎ ぶんそう
大槻 文藏さん 能楽師（シテ方観世流）

ステファニー アルゲリッチ
Stephanie Argerichさん 映像作家

いとう きょうこ
伊藤 京子さん 別府アルゲリッチ音楽祭総合プロデューサー

■ 5・30／出席：会52人、オ15人／司会：中村正子委員／通訳：長井鞠子さん

*アルゲリッチさんと大槻さんの共演を追ったドキュメンタリー作品「Encounter 出会い」の上映会も同日クラブで開催した。

ムハンマド アル アムール
Mohammed Al-Amourさん パレスチナ自治政府国民経済相

■ 6・3／出席：会13人、オ27人／司会：大内佐紀委員／通訳：西村好美さん

ただ き けいいち
但木 敬一さん 元検事総長

■ 6・4／出席：会21人、オ31人／「戦後80年を問う」⑨／司会：井田香奈子委員

かしわら まさき
柏原 正樹さん 2025年アーベル賞受賞者、京都大学数理解析研究所特任教授（リモート登壇）

■ 6・4／出席：オ39人／司会：倉澤治雄会員

にし の じゅんや
西野 純也さん 慶應義塾大学教授

■ 6・6／出席：会21人、オ41人／「韓国大統領選を読む」③／司会：澤田克己委員

もりやす はじめ
森保 一さん サッカー日本代表監督

■ 6・16／出席：会52人、オ35人／司会：森田景史委員

い て ひろひこ
井手 裕彦さん 元読売新聞編集委員

■ 6・19／出席：会17人、オ31人／「知ってもらいたい『モンゴル抑留』の真実～天皇后両陛下のモンゴル訪問を前に」／司会：瀬口晴義会員

たてやま りょうじ
立山 良司さん 防衛大学校名誉教授

さかきし しょう
坂梨 祥さん 日本エネルギー経済研究所中東研究センター長・研究理事

■ 6・20／出席：会19人、オ73人／「イスラエルの対イラン攻撃 その背景と影響」／司会：出川展恒委員

ゆ かわ れいこ
湯川 れい子さん 音楽評論家、作詞家

■ 6・20／出席：会22人、オ29人／「戦後80年を問う」⑪／司会：中村正子委員



左から別府アルゲリッチ音楽祭総合プロデューサーの伊藤京子さん、マルタさん、ステファニーさん、大槻さん

音楽祭の関連企画として2022年5月末、静岡県熱海市のMOA美術館の能楽堂でバッハのバルテータ第2番を弾き、文蔵さんが能を舞っ

「能にはずつと心引かれてきた。一つだけ不満があるとすれば、私が弾いている間、文蔵さんの能がほとんど見られなかったことね」。現代屈指のピアニストであるマルタ・アルゲリッチさんは、シテ方観世流能楽師の大槻文蔵さんとの共演を嬉しそうに振り返る。

総監督を務める別府アルゲリッチ

バッハと能対話した瞬間

映像作家

ステファニー・アルゲリッチ

大槻 文蔵 能楽師

ピアニスト

マルタ・アルゲリッチ

5月30日

た。音楽祭が25回の節目を迎えた今年はこの映像作品が完成した。

能楽界の重鎮ながら、漫画「鬼滅の刃」を能狂言にするなど新しい試みに積極的な文蔵さん。それでも今回は「音源を相当、聞き込んで、どう舞おうか一向に像を結ばなかった」と打ち明ける。しかし「リハーサルでびっくり。アルゲリッチさんが音にのせてくれて『自分は音だ。音の精なんだ』と分かった」。選んだ衣装は女面のような面に、白や金の袴などを合わせたもので「既存の能にはない、男性でも女性でもない」。その姿で時折、ピアノに耳を澄ませる姿などが映像に収められた。

この共演をアルゲリッチさんは「異なる文化の対話。平和を願う行為でもある」と語る。それには「バッハが向いている。多くのジャンルと対話できる音楽だから」。アルゲリッチさんは1941年生まれ、文蔵さんは42年生まれで、80代で現役を続ける芸術家同士でもある。

この映像の監督はアルゲリッチさんの娘のステファニーさん。面や装束をつけるところなど、公演前の様子も撮影し「準備も含めて、能の様式美に魅入られた」と話した。

日本経済新聞社社会・生活報道ユニット文化グループ 瀬崎 久見子

ムハンマド・アル・アムール

パレスチナ自治政府国民経済相

「今こそ国家の承認を」

6月3日



イスラエルによるパレスチナへの攻撃を終わらせることが最優先だと訴えた。「ジェノサイド(大量虐殺)が起きている」と非難し、国際社会にイスラエルに対する圧力を強めるよう求めた。

パレスチナ自治区ガザでイスラエルとイスラム組織ハマスの戦闘が1年半を超えるなかでの記者会見となった。英仏などがイスラエルにガザ侵攻停止を求めたように、停戦圧力は強まっている。「単に声明を出すのではなく、直接的な行動をとってほしい」と力説した。

ヨルダン川西岸地区の苦境にも光を当てた。イスラエルがユダヤ人入植地を拡大し、水などの資源を独占

しているといった例を挙げ「パレスチナ国家ができないよう支配の手段を駆使している」と非難した。

ガザの惨状に目を奪われがちだが、ヨルダン川西岸もイスラエル軍の作戦や入植者の暴力に苦しんでいることを忘れてはならないとの訴えだ。パレスチナ自治政府の財政難についても説明した。

パレスチナはガザをハマスが実効支配し、ヨルダン川西岸を自治政府が統治する分裂状態が続いてきた。ガザではハマスがなお影響力を保つが、自治政府には既に復興計画があるとし「ガザを管理する用意ができている」と述べた。復興に「日本の協力、参画を確信している」とも語り、1953年から続く日本のパレスチナ難民支援を高く評価した。

中東の将来をどう描くかは難題だ。「平和裏にイスラエルと共存できるよう、今こそ国際社会はパレスチナ国家を承認するべきだ」と強調した。「2国家解決」を唯一の道とみなす。しかしイスラエルが応じる兆しはない。

6月1日に大阪・関西万博を訪れ、パレスチナのナシヨナルデーに参加した。「大成功だった」と頬を緩ませた。

日本経済新聞社編集委員 久門 武史

「戦後80年を問う」⑨

但木 敬一

元検事総長

6月4日

「外圧ないと変わらない国」



「戦後80年を問う」だから検察の戦後史が語られるかと思いきや、戊辰戦争で「負け組」となった先祖が斬首され、

祖父はハワイへ渡った話から始まったので、戸惑った人は多かったに違いない。筆者を含めてたくさんの方の記者をけむに巻いた、かつての姿を彷彿させた。

長男の父だけ11歳のとき、ハワイから帰国。但木さんは1943年に巣鴨で生まれ、母の実家を頼って疎開した川越で戦後も暮らした。将来は医師や自衛官を考えたが、目や身長の問題で難しく、無辜の民を救う弁護士を目指した。しかし、司法試験合格後の修習で実際の刑事弁護を見ると、そんなことはおいそれとできないことが分かり、「無実の人を起訴しない検事」になったという。

広島地検などに勤務後、法務省司

法法制調査部（現司法法制部）へ。日米構造協議で非関税障壁と言われた「弁護士」について米国と交渉し、一定の条件を満たす外国人弁護士に法律事務の一部を認める制度（87年施行）の導入を担った。この制度は長年対立してきた法曹三者（最高裁、法務省・検察庁、日弁連）が話し合って物事を進める前例となり、その経験が2000年代に法曹三者が協力して取り組む司法制度改革につながった。

「外国の圧力がないと、この国は抜本的に変わらない。敗戦であつという間に山の中まで民主主義国になったでしょう」。日米に分かれた但木家から始まった「戦後80年」で言いたかったのはこれだった。

質問は①取り調べをはじめ問題が相次ぐ検察の在り方②人質司法③黒川検事長の定年延長問題―など。言葉を選びながら①軍隊ではないので、個々の検察官が一つの方向性を追求していくしかない②人質司法はやめた方がいいが、検察官には真実を解明する義務もある③法務官僚のときも「検察官の独立」が付いて回り、それに反することは許されないと答えていた。

共同通信社編集委員兼論説委員

竹田 昌弘

柏原 正樹

2025年アーベル賞受賞者
京都大学数理解析研究所特任教授

6月4日

若者へ「新しい事に挑戦を」

「3大分野を渡り歩く『船』に乗って、活躍できた」――。

「数学のノーベル賞」とも呼ばれるアーベル賞を日本人で初めて受賞した柏原氏は、会見で自身の研究をこのように例えた。

3大分野とは、数の代わりにxなどの文字を活用する「代数学」、形などを扱う「幾何学」、微分積分などを用いて数学の現象を調べる「解析学」のこと。かつてはそれぞれ独立して探究するのが一般的だった。

柏原氏は東京大の学生時代からの恩師・佐藤幹夫氏が提唱した「代数解析学」の研究を進め、「3大分野を結びつける箱」とも例えた理論



「D加群」の基礎を確立。D加群を用いて数学上の難題を解決するなどし、分野を横断する現代数学の発展に大きく貢献したと評価さ

れた。

授賞式は5月20日に、ノルウェーの首都オスロで開かれた。授賞式を含む数日間には「アーベル・ウィーク」と呼ばれ、若者向けのイベントも開かれてにぎわうという。授賞式の思い出について柏原氏は、賞を授与したノルウェー国王ハラルド5世との会話を振り返った。柏原氏が「78歳でどんな新しい研究ができるだろうか」と打ち明けると、国王は「私は88歳。まだまだできる」と励ましてくれたという。「あと10年は頑張りたい」と力強く語った。

これまでの歩みを問われると「佐藤先生とは、先生が『代数解析学』という新しい見方で解析学をしよう」と始めたタイミングで出会った。新しい分野に飛び込めたことは非常に幸運だった」と話し、数学を志す若者へのメッセージとして「どんな小さな事でもいいから、新しい事に挑戦してほしい」と呼びかけた。

柏原氏はフランスの数学者ピエール・シャピラ氏との研究でも知られ、50人以上と共同研究に取り組んできた。論文も「今書いている」といい、最高の栄誉を得てもなお尽きない研究への情熱がうかがえた。

読売新聞大阪本社科学医療部

村上 和史



とした。が敗因だった。なかつたこと。た姿勢を示して決然として弾劾罷免に対して決然とした。が敗因だった。なかつたこと。た姿勢を示して決然として弾劾罷免に対して決然として

「韓国大統領選を読む」③

西野 純也

慶應義塾大学教授

6月6日

前大統領審判で消極的選択

韓国大統領選は事前の予想通り、野党「共に民主党」の李在明氏が勝利したが、得票率50%を超えられず、与党「国民の力」の金文洙氏との差は8ポイント余りにとどまった。西野教授は「非常戒厳を発令した尹錫悦前大統領に対する審判」で「今回は与党に投票するわけにはいかない」と有権者が消極的選択をした結果だったとの分析を示した。

その上で、司法リスクなどを抱える李在明氏が評価された理由として①貧困から這い上がったきたサクセスストーリー②京畿道知事など地方首長時代の行政手腕③巨大政党を自分の党につくりあげた政治力——を挙げた。与党は保守陣営が分裂し、前政権の非常戒厳と弾劾罷免に対して決然とした姿勢を示さなかつたことが敗因だったとした。

選挙結果は同時に、地域間や世代間の対立など韓国の政治や社会の分断状況を浮かび上がらせた。国会（定数300）の170議席を占める政党を掌握する大統領として「民主化後最も力強い政権」になる可能性がある、としながらも「重要なのは、その強大な力をどこに使うかだ」。李在明大統領は就任演説で「国民統合」を強調したが、西野氏は「国民統合より改革、つまり尹政権の誤りを正すことを重視するだろう」と展望した。

日韓関係はどうか。選挙公約や外交安保スタッフの顔ぶれなどから「関係を安定的に維持したい」というのが李在明政権の強い本音ではないかと述べた。韓国にとってもトランプ関税など外交課題が山積する中、「日本とは新たな対立要素を抱えたくない。できれば協力して臨みたい」という考えもあるという。

西野氏は李在明氏を「特定の理念に縛られない、実用主義という観点を持つている」と評した。「日韓関係で一番重要なのは政治家同士の関係」とも指摘した。国交60周年の今年、どうい外交関係を構築するか。それが日韓双方の政治家に問われている。

共同通信社出身 阪堂 博之

森保

一

サッカー日本代表監督

6月16日

最高の景色へ「輪を大きく」



W杯北中米大会まで1年を切った。日本中を巻き込まなければ、最高の景色にはたどり着かない。「普段と雰囲気が違うのでいささか緊張しています」と実直に切り出した森保監督の偽らざる思いが、冒頭のあいさつで次々とあふれ出た。

難なく突破したように映るアジア最終予選は「厳しい戦い」の連続だったこと。チームが掲げるW杯優勝への本気度。サッカーという枠にとられず、日本のために戦う覚悟。そして常に口にする「共闘応援」への呼びかけ。穏やかな口調なのに、言葉は自然と熱を帯びていく。「これまでW杯で世界一になった国々は（代表チームへの）国の関心度が100パーセントでした。皆さんの力もお借りして、より多くの方々の関心をサッカーに寄せていただいて、W杯へ挑んでいきたい」。質問を挟む

ことなく、丁寧に、18分間にわたって語り続けた。

なぜ世界一なのか。背景は二つある。一つは8強入りを逃した前回のW杯カタール大会。PK戦でクロアチアに敗れたが「まだまだ上に行けた」と。悔しさをあらわにする選手の間にもくみ取り、頂点を現実的なものに捉えた。もう一つは、2050年までにW杯優勝という長期的な目標を掲げた日本協会の「2005年宣言」。「それぞれが自分の立場から何ができるかを考えることが、世界一の確率を上げることになる」。たとえ在任中に到達できなくても、日本サッカーの発展を強く願う心が代表監督としての根底にある。

就任から7年。「プレッシャーはありますけど、ストレスはない」と笑う。批判を歓迎し、スマホで目に入った記事からヒントを得ることも。多忙の合間には全国各地に向かう。ファンサービスにも積極的だ。「称賛、批判を含めて見てくださる方の輪が大きくなることがうれしくて幸せなこと。何もない無関心が一番さみしく、つらい」。語り尽くした言葉の端々に、切なる思いが込められていた。

スポーツニッポン新聞社編集局スポーツ部 坂本 寛人

「知ってもらいたい『モンゴル抑留』の真実」

井手 裕彦
元読売新聞編集委員

6月19日

「知られざる抑留に光を」



第2次世界

大戦後に日本人が抑留されたのは、ソ連によるシベリア抑留だけではない。ジャーナリストの井手裕彦さんは読売新聞記者だった2016年から、モンゴルでの日本人抑留問題に取り組んできた。

約57万人が連行され9・6%にあたる約5万5千人が死亡したシベリアと比べ、モンゴルは抑留者約1万4千人の12・1%にあたる約1700人が死亡する過酷な環境にあった。国際法に反する民間人抑留も多かったが、シベリア抑留の陰でほとんど知られていなかった。

井手さんは、仲間の命の保証を求めて危険を顧みず当局あての「嘆願書」を書いた日本人抑留者の記録をたどろうと2020年にウランバートルの国立中央公文書館で調査。日

本政府も存在を知らなかった1100人の日本人の記録を発見した。記された379人の死亡記録のうち42人は、厚生労働省が身元特定に至っていなかった。井手さんが持ち帰った記録をきっかけに、34人の身元が特定されたという。

7月には天皇、皇后両陛下が国賓としてモンゴルを公式訪問する。両陛下が、抑留中に死亡した日本人の慰霊碑を訪ねて供花する予定であることに井手さんは注目。「平成の天皇皇后両陛下(上皇ご夫妻)は戦後60年にサイパン、戦後70年にはパラオと、南方の戦没者を慰霊されてきた。戦後80年は、天皇として初めて、北方の戦争犠牲者に対する慰霊の旅となる。ご訪問を機に、置き去りにされてきたモンゴル抑留問題に光を当てたい」と考えている。

井手さんは5月27日から6月13日にモンゴルで調査。新たな死亡記録を入手したほか、日本政府が把握する日本人墓地16カ所以外の埋葬地を見つめ、厚労省に伝えた。これまでに8人の遺族を探し出して直接、記録を届けたという。「砂漠から1本の針を探し出すような作業。取り組みを広く周知してほしい」

朝日新聞社会部 北野 隆一

「イスラエルの対イラン攻撃
その背景と影響」

立山 良司
防衛大学校
名誉教授

坂梨 祥

日本エネルギー経済研究所中東研究センター
長・研究理事

6月20日

イラン 核断念せぬ可能性

6月13日、イスラエルはイランへの大規模攻撃を始めた。核開発をめぐる米イラン協議が続く中での「奇襲」だった。「まさか」と同時に「またか」との思いがよぎった。ネタニヤフ首相がまたしても、自らの政治生命のために軍事行動に出たか。

立山氏(右)は、このような近視眼的な見方にやんわりくぎを刺した。

「一面としてありうるが、あまり強調するのはイスラエル政治を見間違えている」



この20年、イスラエルはイランの核開発を阻止するため、サイバー攻撃など様々な妨害工作をしてきた。イランの核兵器保有に対するイスラエル国民の脅威認識は、「正しいかどうかはともかく、ものすごく強い」。

こうした認識が攻撃の背景にある。

ただ攻撃は核施設にとどまらず、病院やエネルギー施設なども標的となっている。私事だが、特派員駆け出しで駐在したテヘランで、日本に映像を伝送するため幾度となく訪問した国営放送局も攻撃を受けた。

イランは、ミサイルやドローンで報復攻撃を続けている。坂梨氏(左)は「イラン側から攻撃をやめることはない」と見通す。ケンカを売られた側が降参すれば、先制攻撃を正当化してしまうからだ。制空権を奪われたイランだが、小型高速艇を使ったタンカー攻撃など様々な「非対称戦略」の切り札を持つという。

坂梨氏は「イランが核開発計画を放棄しない可能性は非常に高い」と指摘した。立山氏も同じ見方だ。空爆で核施設が破壊されても知識やノウハウは残る。核兵器を持たないから攻撃を抑止できなかったとの思いが強まるのも容易に想像できる。

これからの焦点は何といってもアメリカの出方だ。双方の市民を巻き込んだ攻撃の応酬はいつまで続くのか。ネタニヤフ首相の出口戦略について、立山氏は「ない」と断言した。この点は、ガザ攻撃などと同様、「またか」のようだ。

NHK出身 竹澤 顕

「戦後80年を問う」①

湯川 れい子

音楽評論家
作詞家

6月20日

「音楽と平和」に思いを込め



敗戦の混乱期、ラジオの米軍放送から流れるスイングジャズに夢中になり、中学1年のころ、聞き覚えのあるメロデー

イーが心に響いた。戦時中、召集された長兄が、出征直前、東京・目黒にあった自宅に防空壕を掘っていた際に口笛で吹いていた曲だった。

「曲名を知りたい」と毎日、ラジオを聴き続け、約3年後、ついにハリー・ジュームス・オーケストラの「スリーピー・ラグーン」だと分かった。20歳で初めてエルビス・プレスリーの歌を聴き、鳥肌が立つほどの衝撃を受けた――。

国内初の女性の音楽評論家、作詞家、翻訳家など、さまざまな「顔」を持つ湯川れい子さんは、音楽とともに歩んできた道のりを、しっかりと口調で、時には懐かしそうな表情で話した。

ビートルズの初来日（1966年）時に単独インタビューを行い、米ラスベガスに飛んでプレスリーと初対面（71年）を果たすなど、世界的なアーティストらと積極的に交流する一方、日本の社会的、政治的な問題に対して自分の考えを述べる。そんな姿を見るたびに「戦争の時代を知る世代の一人だ」と感じてきた。

会見でも、海軍大佐の父と武家出身の母の間に生まれ、両親は洋間の蓄音機から流れるレコードに合わせてダンスし、その2人の間で幼い自分も体を揺らしたという思い出が語られた。けれども、その後、出征した長兄はフィリピンで戦死し、軍令部の会議室に連夜、詰めていた父も敗戦の前年に病気で急逝。ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルのパレスチナ自治区ガザ地区への攻撃など現在の状況と重ね合わせて「戦争には正当な理由はない」と、力を込めた。

89歳のいまも現役で仕事を続ける湯川さん。記念の揮毫では「音楽は愛」という言葉とすてきなイラストを寄せてくれた（2ページに写真）。

毎日新聞社編集局 明珍 美紀

サイバー記者ゼミ④

第1部「サイバーセキュリティの基本のキ」、第2部「インシデント発生時の実務や関連法」

5・31／講師…第1部 新井悠 NTTデータグループ エグゼクティブ・セキュリティ・アナリスト、第2部 山岡裕明 弁護士（八雲法律事務所）／出席…会場20人、ウェブ29人

第1部では、新井さんが「不正ログイン」事例をテーマに講演。実際に起きた2つのサイバー攻撃事件を例に、攻撃者が事前に入手したIDとパスワードの組み合わせ（「コンボリスト」）を使い各種ウェブサービスに自動的にログインを試みる「リスト型攻撃」や偽メールなどを利用して個人情報情報を詐取する「フィッシング」などの特徴を分かりやすく解説した。新井さんは「他人になりすまして不正ログインすることは脈々と悪用されている手口で古典的な手段だ。不正ログインへの対策が多くの方に普及・啓発されるよう、報道の皆さまには怖さや対策の重要性を伝えてほしい」と語った。

第2部はサイバーセキュリティに関する法務に強い弁護士の山岡さんが登壇し、「インシデント（セキュリティの重大事故）発生時の実務や関連法」をテーマに解説した。「サイバーは技術が関わる新しい

スクだが、人がやる以上は手口がある。経営層もメディアも、技術の問題だからといって技術部門に丸投げすることなく、向き合う必要性が高まっている」と強調した。（事務局）
*「サイバー記者ゼミ」は、日本記者クラブと日本ネットワークセキュリティ協会（JNSA）が協力して行う現役記者向けの勉強会です。次回は9月17日18時から開催します。

土曜記者ゼミ

1T編②

「NICAR報告」

6・14／講師…森若奈 中日新聞社経済部記者／出席…会場12人、ウェブ28人

4日間の費用「高くない」

米国のIRE（Investigative Reporters and Editors）が毎年開催している記者向けのパソコン利用講座NICAR（National Institute for Computer-Assisted Reporting）が、3月6日から9日まで米ミネアポリスで開催された。今回、初参加の森さんは航空券やホテル代などで合計40万円かかったという「4日間コーディングの基礎、データ分析の手法、米国でデータ報道に携わる第一人者の話が直接聞けて、人脈ができるなら費用は高くはない。若い記者が参加を希望したら、会社は力になってほしい」と語った。（事務局）

江藤拓前農林水産相の失言報道

山口 貴由（佐賀新聞社県政キャップ）

「書き残すべきだ」と直感
記事化は一紙「東京で炎上」

5月18日、自民党佐賀県連の政治資金パーティーに約千人が集まっていた。登壇した江藤拓農林水産相（当時）は、約20分講演した。「私、実は総裁選で一度も『石破茂』と書いたことはございません。にもかかわらず（農相に）ご指名いただきました」。漫談のように慣れた語り口。会場は和やかなムードに包まれた。

一通り笑いを誘った後、本題のコメ政策に移った。「私はコメを買ったことはありません、正直。支援者の方がたくさんコメを下さるので、まさに売るほどある。私の家の食品庫には」。会場がざわつくことはなく、何事もなかったように話は続いた。

米価で苦労の人々浮かぶ

講演後も、大臣の言葉が頭を離れない。会場を出た後、レコーダーを何度も聞き直した。「これは失言では」。そんな考えが頭をよぎった。報じれば「切り取り」とたたかれ

るだろうか。現場にいた10社前後の報道他社は報じるだろうか。自分の感覚がずれているだけかもしれない。政治家の発言を「失言」として報じる時、こんな不安がつきまとう。一方で、米価高騰に苦労している人たちの顔が思い浮かんだ。スーパーをはしごしたり、ご飯をかき増したりと工夫している人を身近に知っている。電話でデスクに相談した。「失言と考える発言がありました。書き残した方がいんじゃないかと思えます」。問題と思った部分を読み上げた。「見出しが取れるように記事にしよう」

翌日、いつもより早く目が覚めて、県政記者室で他紙をめくった。報じていたのは佐賀新聞だけだった。「記事化は自分の過剰反応だったのかもいけない」と思った。

午前11時ごろ、スマートフォンが断続的に鳴り始めた。東京支社時代に知り合った官僚や記者仲間から、当該記事のリンク付きでメッセージ

自民党佐賀県連の政治資金パーティー「政経セミナー」で講演する江藤拓前農林水産相（5月18日／佐賀市内／佐賀新聞社提供）



が届く。「これやばいですね」「東京で炎上してます」。正午前、自民党関係者から興奮気味に電話がかかってきた。「テレビ見ましたか？ 全国ニュースになってますよ」。事態がのみ込めないまま記者室に戻り、テレビを見る。釈明に追われる大臣の姿が映し出されていた。翌日、確認できる範囲で全紙が失言を報じていた。コメを巡る国民の怒りが噴き出した。21日午前、江藤氏は辞表を提出した。

実名の1枚の手紙が励みに

辞任した日、デスクから「あの日

の舞台裏を書いてほしい」と指示された。「たまたま現場にいただけで」。地道な取材を積み重ねたような記事ではなく、「舞台裏」が思い浮かばなかった。「発言をおかしいと思って記事にしたのは山口しか書けない」。あつけなく押し切られた。

会場の雰囲気、記事化の不安、想像を超えた反響。見聞きして感じたことを正直に書いた。5月22日付朝刊1面で「江藤農相更迭」のトップ記事の隣に、100行超の原稿が載った。後日、県内の読者からお便りが届いた。「社会に関心が必要だと思ひ知らされました。いい教訓をありがとうございます」。ネットニュースについて1万件超の匿名コメントより、実名で届いた短く朴訥な1枚の手紙が重く感じられた。こういう読者一人一人に新聞は支えられている。

地方発の短いニュースがSNSをはじめネット上で注目を浴び、中央政界を揺らした。地方紙の可能性を見た思いがした。江藤氏の辞任劇を経て、「令和の米騒動」の主役は小泉進次郎氏に交代した。今度の舞台は参院選。地方から見届ける。

やまぐち・たかよし▼2007年入社
有田支局 県政 佐賀市政 東京支社
などを経験 23年4月から現職

長嶋茂雄さん死去

清水 満(産経新聞社客員特別記者)

楽しませるための美学 追うメディア強く意識

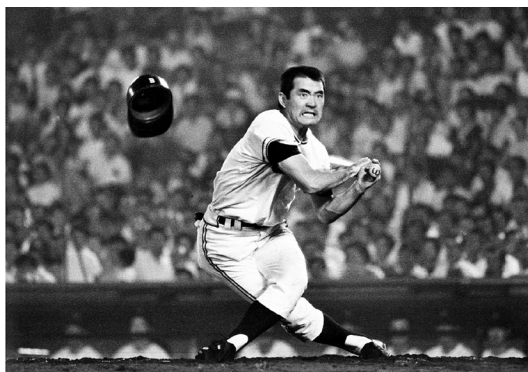
野球界の「スーパースター」長嶋茂雄さんが6月3日、死去した。戦後の国民的娯楽・プロ野球の象徴である長嶋さんは誰もが知る。1978年に巨人担当で初めて会った。以来、40年余。ずっと野球愛にあふれる素顔を見てきた。そこを書いてみる。

ミュージカル 踊りに興奮

いったんユニホームを脱いだ81年秋、大リーグ取材でニューヨークを訪れた長嶋さん同行、ブロードウェイのミュージカルを一緒に見た。主役の女性が10分以上も一人で踊り続ける。ホテルに戻ると飲みぬお酒を手にし、興奮する姿があった。

「見ましたか? 踊り終えたとき呼吸の乱れが全くなかった。しかも笑顔ですよ。これぞプロフェッショナル。あの美しい動きの陰には、とんでもない練習量があるんですね」

現役時代、試合前の練習ではほんの数スイングで終え、本番で快打す



後楽園球場での巨人対中日で、空振りして豪快にヘルメットを飛ばす巨人の長嶋茂雄さん(1968年9月16日/産経新聞社提供)

る。人は天才と呼んだが、長嶋さんは首を振った。「ワンちゃん(王貞治さん)もそうだけど、俺たちはバットを人一倍振った自負がある。お客さんは、いいプレーを見に来る。格好よくやらなきゃ」。舞台裏を見せない長嶋流の美学を知った。

現役時代、大きめのサイズをかぶってヘルメットを飛ばす。内野ゴロを猛ダッシュして捕り、一塁への送

球は手の先をピーンと伸ばしひらひら揺らすのは歌舞伎の所作をまねたなどの「噂の真相」は?

「みんな本当です。お客さんが、どうしたら喜ぶかを考えましてね。たとえ打てなくても、どこかで楽しんでもらおうって」と笑った。野球というスポーツを楽しく、エンターテインメント化させる。メディアが追隨するのを意識してた。「多くの国民に知ってもらおう。われわれの一挙手一投足を伝えてくれるのはメディアなんです」。だから「最近、新聞の部数はどう?」「テレビの視聴率は?」と気遣う。こうして仕掛けたメディアとのコラボが増幅され、プロ野球が国民的娯楽になった。長嶋流プロデュースは巧みである。

現場主義「取材の原点ネ」

メディアを知るから好奇心も旺盛だ。81年、ヤンキース対ドジャースのワールドシリーズ(WS)第1戦のこと。ヤンキースのベンチには先発のロン・ギドリー(78年サイ・ヤング賞)がいた。気難し屋で有名である。開幕前の緊張感で誰も近づけなかったが、ミスターが動いた。

「ハーイ、ロン、どう、コンディション?」にギドリーが苦笑いして答える。「全ての準備は整っている

さ」と。遠巻きに見ていたニューヨーク・メディアがミスターを追っかけメモを取っていた。「(現地メディアは)出遅れてる。取材は気後れしたらダメですね。俺だって答えたくないときでも、ガッと来られたらつい話しちゃう」とほほ笑む長嶋さんがいた。

ある時、テレビで見た海外メジャーゴルフで現場でリポートする姿に帰国後、「どうしてそんなことまで」と話すと首を振った。「現場でなきゃダメって、俺から頼んだんだ。一流プレーヤーの息遣いは直に肌で感じなきゃダメでしょ。取材の原点ネ」という。駆け出し記者には勉強になった。

83年のWSではフィリーズの本拠地フィラデルフィアのシティホール前の階段を駆け上って「こんな感じかな?」と映画「ロッキー」のワンシーンを演じた。お茶目な一面を見た。拙文を詫びつつ、最後に長嶋夫人の亜希子さんの生前の言葉。「うちの人の瞳はハイゼルグリーン。すごく澄んでいて吸い込まれそうになる。私の一目惚れなのよ」って。誰もがその姿にひかれていた。

しみず・みつる▼1975年入社 サンケイスポーツ運動部で主にプロ野球取材 2019年から現職

韓国大統領選 李在明氏当選

横田 明（NNNソウル支局長）

分断顕著 問われる手腕 会合でビビンバ「和合」演出

「本当に大統領選になるんだ！」。ことし4月、韓国の尹錫悦^{ユンシクニョク}前大統領が罷免されたその日、憲法裁判所の前で中継を終えた私は、妙な感覚に陥っていた。

韓国の大統領選は5年に1回。尹氏の本来の任期は2027年まで。赴任期間が26年夏前には終わる予定となっている私が、そもそも大統領選を取材するはずではなかった。

「カイゲン」脳内変換できず

罷免の発端は、言わずもがなではあるが、尹氏が去年12月3日に宣言した「非常戒厳」にある。

「カイゲン」。非常戒厳をめぐる一報に接した際、恥ずかしながら、何のことなのか正直理解が追いつかなかった。思い返せば、高校の世界史の授業で、多くの市民が犠牲になった光州事件につながったのが戒厳。そんなことを習ったような。「カイゲン」が韓国では悪名高いものとして認識されている「戒厳」と脳内で変換できるまで少々の時間を要した。



就任式で演説する李在明大統領（6月4日/ソウルの国会内/日本テレビ放送網提供）

戒厳の宣言から解除まで、日本・韓国を問わず、あまたの報道がされてきたので、ここでは詳細には触れないが、戒厳が韓国社会に大きなショック、そして混乱をもたらしたのは間違いない。この戒厳によって、尹前大統領が弾劾訴追され、職務停止に。この頃から、徐々にだが大統領選が現実のものとして近づきつつあった。

同時に尹政権への批判の急先ぼうに立っていた当時、最大野党の代表、李在明^{イ・ジミン}氏が次期大統領に最有力。一

部では当確かのようにささやかれ始めた。

李在明氏といえば、言わずと知れた対日強硬派。これまでに相次ぐ日本への厳しい発言が伝えられてきていて、この時大統領選はまだまだ先の話だったが、日本メディアにはすでに別の重い空気が漂っていた。

両国関係が完全に冷え込んでいた日本と韓国は、尹政権で劇的ともいえるかたちで改善に転換した経緯がある。それだけに日本としても李在明政権の誕生は懸念しているのでは。しかし、外務省関係者を取材すると違う考えも聞こえてきた。「李在明氏は現実主義者。日本との関係を崩すのが得でないと考えれば、強硬姿勢は示さない」と絶対的なアレルギーは示さなかった。

にわかに信じがたい自分もいたが、実際、大統領選が近づいてくると、李氏は実用主義を掲げ、日本を「重要なパートナー」と位置付け。ある意味軌道修正を図っていた。

その李在明氏は、戒厳への評価が争点の一つとなった大統領選で、弾劾への厳しい姿勢から有権者への期待が高まり、選挙戦を優位に展開。結果として歴代最多得票数を更新し、大統領に当選。尹氏の弾劾訴追からおよそ半年ぶりに「トップ不在」が解消された。

「みんなの大統領」を強調

ただ、選挙を通じて、改めて大きな課題が浮き彫りとなった。

戒厳で大きな混乱に陥った韓国社会だが、それにもかかわらず、今回の選挙で4割以上の有権者が、その戒厳を宣言した尹氏を支持していた保守政党の候補に一票を投じた。一枚岩どころか、完全に二分とも言える状況になっていることは動かしようのない事実だ。

李大統領は就任式で「みんなの大統領になる」と強調したが、国民をまとめるのは決して容易ではない。

就任後、李大統領は、しばしば二大政党のシンボルカラーが描かれたネクタイを着用。さらに、二大政党が一堂に会する会合では、ご飯と具を交ぜて食べる韓国料理「ビビンバ」をメニューに選ぶなど「和合」を演出。融和ムードの演出に余念がない。日本に対しても、いまのところ友好的な姿勢を貫いている。

「民主主義が韓国に戻ってきた」と強調する李在明大統領が、分断された社会の結束、そして日韓関係などに対してどのようなかじ取りをするのか。その手腕が問われている。

よこた・あきら▼2004年日本テレビ放送網入社▼社会部 国際部 中国総局 政治部「News every」などを担当 23年から現職

新・列島報告⑧ 石川県
横綱 大の里誕生

茨城に新たに支局開設 紙面も「横綱相撲」目指す

杉山 圭一郎
(北國新聞社編集局担当局長兼運動部長)

「石川県津幡町」と聞いて、ピンとくる人はなかなかのスポーツ通と言えるだろう。東京五輪の女子レスリングで金メダルを獲得した川井姉妹（姉・金城梨紗子、妹・恒村友香子）の故郷だ。そして今、新たなスターが誕生した。大相撲で第75代横綱となった大の里である。

津幡町は金沢市の北隣に位置し、人口3万7千人の小さな町。4度目の幕内優勝で横綱昇進を引き寄せた5月の夏場所、町役場でパブリックビューイングが行われ、町民が大応援。役場庁舎の外壁には横綱誕生を祝う懸垂幕が掲げられ、町は両国国技館をしのぐ熱気に包まれた。

■輪島以来、52年ぶり3人目

盛り上がるのレベルでいえば、本社編集局も負けてはいない。石川県出身の横綱誕生は、第54代の輪島（七尾市出身、金沢高一・日大）以来52年ぶり3人目。250年以上という大相撲の歴史の中で横綱はわずか75人しか生まれていない。石川県民にとって「一世一代のニュース」ということで、かつてない大胆な紙面を読者に届けた。

優勝が決まった夏場所13日目の5月23日は4ページの号外「大の里横綱昇進へ 最速出世」を制作した。表面は勝利の瞬間をとらえた写真1枚を見開きで大きく掲載し、裏面には13日間の取組写真を並べ、喜びに沸く地元パブリックビューイングの写真を加えた。

翌24日朝刊はラッピング紙面（4ページ）を含め12ページにわたる大の里特集を組んだ。大の里の父・中村知幸さんの手記、連載「最速頂点」の第1回、ラッピング紙面の裏面には輪島と大の里の「徹底比較」と題して経歴などをイラストやデータ表をふんだんに使って紹介した。

編集局では、横綱昇進を想定し、あらかじめ特別紙面の構成を考えていたので、編集作業はスムーズに進んだと思う。



上：大の里が優勝した5月23日の北國新聞号外
下：翌24日付の同朝刊ラッピング紙面

R常磐線「ひたち野うしく駅」近くに「茨城牛久支局」を開設し、大の里に密着する「番記者」を置いた。かつてヤンキースなどで活躍した松井秀喜さん（石川県能美市出身）を追いかけて、ニューヨークとロサンゼルスに支局を構えたことはあったが、一人の石川県人のために支局を設けるのは松井さん以来となる。

■地震報道が編集局鍛える

石川県では昨年1月1日に最大震度7の能登半島地震が発生し、奥能登の駐在記者によるルポを大量に出稿する「非日常」の紙面展開が続けた。この慌ただしい地震報道で編集局は鍛えられた、と個人的には感じている。それは大の里報道における柔軟かつ迅速な紙面構成・制作に生きたのではないだろうか。

史上最速のスピード出世を果たした横綱に離されないよう、地元紙として読み応え十分の「横綱相撲」を貫きたい。

すぎやま・けいいちろう▼1998年入社 ニューヨーク支局長 販売局長 富山本社代表を経て 2025年5月から現職

包囲下のサラエボに1カ月 言わずにおいた「あのこと」



いとう よしあき
伊藤 芳明

1974年毎日新聞社入社 大阪
社会部を経て カイロ ジュネ
ーブ ワシントンに駐在 イラ
ン・イラク戦争 湾岸戦争 パ
レスチナ紛争 旧ユーゴ内戦な
ど紛争地取材に当たる 編集
局長 主筆を歴任し 2017年
退社 14年～17年日本記者ク
ラブ理事長 著書に『ボスニ
アで起きたこと』(岩波書店)
など

サラエボは坂の街だ。1984年
冬季五輪の会場になった2千級級の

5つの山に囲まれ、山岳地帯からの
急勾配が、街の中央を東から西に流
れるミリヤツカ川まで落ち込む。そ
の斜面にへばりつくように住宅が建
ち並んでいる。

ミリヤツカ川をはさんで対岸の丘
陵地帯からは一切遮るものがなく、
住宅群が一望のもとに見渡せる。停
戦が発効している間も、昼間は対岸
に陣取るセルビア人武装勢力のスナ
イパーに狙い撃ちにされ、夜間は気
まぐれな砲弾が撃ち込まれて、住民
たちを恐怖に陥れている。

95年2月。クロアチアの首都ザグ
レブから国連の輸送機に乗せてもら
い、このボスニア・ヘルツェゴビナ
の首都に入った。サラエボの街は旧
ユーゴスラビア内戦で、92年以来、
セルビア人武装勢力に包囲され、住

民30万人は3年近く孤立状態を強い
られていた。

国連輸送機が運び込む食糧などの
コンテナが、住民にとって命の綱だ。
コンテナを積み込んだ輸送機の貨物
室の壁際に40席ほどのベンチが据え
付けられ、サラエボ駐在の外交官、
国連関係者、我々ジャーナリストが
便乗させてもらうのである。

◆高台の2階 東南の空探し

救援物資を陸送する英国のコンボ
イに同乗するなどして、サラエボは
それまで2度訪れたが、滞在は1日
か2日だ。今回は1カ月ほど滞在し
て住民と時間を共有してみたい。で
きれば日記形式で報告できないか、
と考えていた。

そのためにカギとなるのは安定的
な通信手段の確保である。91年の湾
岸戦争取材では、CNNなどテレビ

局が持ち込んだ巨大なバラボナン
テナ「デイツシュ」がバグダッドの
ホテルの庭に林立し、東京への送稿
はその衛星電話のお世話になった。

この数年で衛星電話は飛躍的に進
化し、折り畳みパネル型のアンテナ
を含めても大型のアタッシュケース
大で収まり、重量20キ、一人で持ち
運びができるまでに小型化してい
た。それを駐在先のスイス・ジュネ
ーブでレンタルし、持ち込んだのだ。

衛星電話はインド洋上空に浮かぶ
通信衛星経由で日本と通話する。こ
のためパネル型アンテナは通信衛星
に向け、サラエボからだと東南の空
に向けてセットする必要がある。地
元紙に掲載された貸間情報に片っ端
から電話をかけ、高台にあるアパー
トの2階で、南向きにベランダがあ
る貸し部屋を見つけた。

ニザおばさん(58)とその夫(67)

が住み、前年に33歳で戦死した長男
の6畳間ほどのベッド付きの部屋を
貸してくれるという。南に開けたベ
ランダからの衛星電話の通信状況は
良好で、1カ月3000ドイツ・マル
ク(約1万8000円)で借りるこ
とにした。国際機関で働く外国人が
下宿する相場が2000～3000ドイ
ツ・マルクだったから、妥当な額だ
ろう。その日から、サラエボの東端
に広がる旧市街から急勾配を10分ほ
ど登ったこのアパートを拠点に、街
を歩き回る生活を始めた。

◆日本人と知って冷たい反応

とりあえず負傷者取材しようと
病院を回り始めて、医師たちが日本
人とわかった途端、一様に非協力的
な態度に変わるのに面食らった。当
時、明石康氏が旧ユーゴ問題担当の
国連事務総長特別代表として、各民



食糧供給が10日間途絶えたため、破壊された家の前で野菜の栽培を試みる地元の女性（ボスニア・ヘルツェゴビナ、サラエボ/1995年6月/AFP時事）

族間の仲介に当たっていた。我々には中立・公正と見える明石氏の仲介工作も、サラエボの住民から見るとセルビア側に加担していると映り、反日感情を呼び起こしているらしいと、徐々に見えてきた。

また20代の若者たちと食事した時は、たわいもないジョークを連発し、外出禁止令の午後10時ギリギリまで笑い転げる姿に驚かされた。しばらくして「精神に異常をきたした人が街中に異様に多いことの裏返しでは」と思い至った。就寝中に砲撃でやられる。歩いていて狙撃される。サラエボにいる限り、このリスクから逃れることはできない。ジョーク

の連発は、閉塞状態に置かれた精神が、緊張を一瞬でも忘れるための知恵ではないのか？ 笑う行為が精神の均衡を保ち、正常に踏みとどまるための自己防衛策なのだ、と感じた。

◆シートの薄明りに後ろ姿が

サラエボで過ごす時間は、外から見ていたのではわからない、こんな驚きの連続だった。そんな生活の中で、「あのこと」は起こった。

その日は朝から体が重く、少し熱っぽかった。昼間歩き回り、疲れて眠りに落ちても、砲撃の音で眠りを破られる。そんな日々が3週間近く続き、疲れがたまってきたのかもしれない。取材を切り上げて昼過ぎにアパートに戻り、部屋のスツーカーのカギを開けて貴重品だけ放り込み、ベッドに倒れ込んだ。

物音が目が覚めた。窓ガラスの代用に張った、「UNHCR」（国連難民高等弁務官事務所）と印刷されたビニールシートを通した薄明りで、後ろ姿が見えた。部屋の主人だとすぐにわかった。彼は鍵のかかっているスツーカーから貴重品の入ったバッグを取り出そうとしていた。「ノー！」。大声で叫ぶと、まさか帰宅してベッドにもぐりこんでいるとは思わなかったのだろう。振り向

いた驚がくの表情は、30年が経過した今も鮮明に覚えている。バッグが悪そうにバッグを戻すと、無言で部屋を出て行った。

これまで外出時には必ずスツーカーを施錠し、貴重品も確認していたから、盗まれたことはないはずだ。実直そうな主人がなぜ？ 疑問は尽きなかったが、彼がバッグの中のドイツ・マルクに手を出そうとしたのは明らかだった。

旧ユーゴ内戦の行方は混とんとし、サラエボ包囲はいつ終わるか予測がつかない。頼りにしていた長男を失い、老境に差し掛かりつつある夫婦の先行きに不安を覚え、少しでも外貨を手に入れたい、と思ったとしても非難できるだろうか？ 我ながら甘いな、と思いつつも、追及する気持ちにはなれなかった。

夕刊に連載した「サラエボ日記」はウィーン支局の後輩が継続して書き続けてくれることになった。後輩との引き継ぎの際、現金管理に注意するようにとは伝えたが、「あのこと」についてはついに触れなかった。

弱い立場の人たちに寄り添う、と我々はよく言う。ソマリア、ウガンダなどアフリカの飢餓、イラク、パレスチナ、リビアなど中東の紛争、そして今回の旧ユーゴ内戦……。80年

代から90年代にかけ、現場を歩き回るたびに感じたことがある。我々は取材が終われば、いつでもその地を離れることができる。サラエボでも国連の輸送機に飛び乗りさえすれば1時間足らずでザグレブに脱出でき、翌日にはジュネーブの日常に戻ることも可能だ。

しかしニザおばさん夫妻には、包囲下のアパートで暮らし続ける以外の選択肢はない。「寄り添う」と言っても、彼らとの間には埋めようのない隔たりが横たわっている。現場の状況が悲惨であればあるほど、この隔たりは広く、重い。

◆「おふくろの味」と抱擁

「あのこと」以降、主人は明らかに顔を合わせるのを避けていた。サラエボを去る朝、ニザおばさんが銀紙で包んだ小さな塊を持って部屋にきた。薄く延ばしたパイ生地の中に、チーズや卵を詰めて焼き上げた「シルニツァ」と呼ばれるボスニア版おふくろの味だ。

「途中でお腹がすくといけなから。チーズを奮発したからね」。こう言うから、息子にするように私を抱きしめた。小刻みに揺れる白髪を見て、「あのこと」を言わなくてよかったな、と改めて思った。

私が会ったあの人

能條桃子さん NO YOUTH NO JAPAN 代表理事 社会を変えるしなやかに

外山 薫(テレビ朝日)

初めて会った時、彼女は25歳だった。議員会館の大きな会議室。国政選挙などの候補や議席の一定割合を女性に割り当てる「クオータ制」の推進を求める集会で、「このペースでは100年経ってもジェンダー平等は程遠いです」と、議員たちを前にしたたかに、それでいて柔らかに話す能條桃子さんを見て「人生2回目?」と思った。

速攻「#わきまえない女」

能條さんは、20代の投票率が80%を超えるデンマークに留学したのをきっかけに若者の政治参加を促す「NO YOUTH NO JAPAN」を立ち上げた。「若い世代なくして日本はない」という意味を込めた。

彼女が一躍有名になったのは、東京オリ・パラリンピック開催前の2021年。組織委員会の森喜朗会長が臨時評議会で「女性がたくさんいる会議は時間がかかる」

「(組織委の女性)はわきまえておられる」などと発言した。

「今の時代にこんな発言しちゃう人がオリ・パラのトップで日本がそういう国って見られたらやばいと思うてー」。当時、慶応義塾大学4年生(21歳)だった能條さんは、有志らと翌日から署名活動を始め、1週間で15万筆以上を集めた。「#わきまえない女」のムーブメントは森会長の辞任へとつながっていった。モヤモヤを声に出すのは勇気がいる。報道する側も一緒だ。モヤる二



左から本間智恵アナ、筆者、満上由夏デスク、能條桃子さん(2025年2月/筆者提供)

ユースを本音で語ろう、というポッドキャスト「ホンマのホンネ」の制作を去年9月からテレビ朝日で始めた。MCはテレビ朝の本間智恵アナウンサーと報道局の溝上由夏(ドキュメンタリー「女性議員が増えない国で」がメディア・アンビシャス大賞優秀賞受賞)と私の3人トークショーだ。今年2月、能條さんをゲストに呼んだ。当時、森会長が何者か知らなくて、「署名作る前に検索したら日本の元総理らしい」と有志メンバーたちと一瞬ひるんだという。しかし、「逆に知らないウチらくらいしかできない」となって、署名開始のボタンを押したというのを聴き、声を出して笑ってしまった。

能條さんは、20、30代の女性や性的マイノリティの地方議員を増やす活動「FIFTYSPROJECT」の代表も務める。政治分野でのジェンダー不平等の解消を目指し、23年の統一地方選挙では理念に賛同する29人が立候補し、24人が当選した。候補者を「報道ステーション」が密着したが、選挙カーなし、スリッパを引いて電車移動、疲れたらお昼寝。「24時間戦えますか?」の選挙の仕方ではなかった。能條さんは「議員も人間らしい生活できな

いと感性失っちゃいますし、そうじゃないと次の議員になりたいという人が増えていかない」と、違う風を吹かせようとしている。

若者にばかり背負わせては

今や、SNSや動画配信などの戦略は、選挙では欠かせないツールだ。しかし、「女性・若い・リベラル、この3つが重なる」とハラスメントが増えるという。能條さん自身も、誹謗中傷の対象になることがある。候補者のネットワークを作って互いにケアしたり、SNSアカウントをチームで管理したりなどノウハウを共有して支援している。

「次の世代に、もつとフェアで平等な生きやすい社会を残したい」という能條桃子さん、27歳。会うたびに元気をもらおうと同時に、若者にばかり背負わせていいものではない、と身が引き締まる。

(とやま・かおる 2003年入社 経済部 ニューヨーク駐在などを経て 23年からABEMAニュースプロデューサー)

次号は外山さんが駆け出しの頃、財務省記者クラブで一緒だった三沢耕平さん(毎日新聞社)にバトンが渡ります。

第27期日本記者クラブ委員（2025・2026年度）（◎印委員長 役職は7月1日現在）

総務委員会

◎坂尻 顕吾

朝日新聞社取締役コンテンツ統括／編集担当兼ゼネラルマネジャー兼東京本社編集局長

福島 良典

毎日新聞社論説委員長
日本経済新聞社常務執行役員論説委員長

菅野 幹雄

産経新聞社上席執行役員論説委員長

榊原 智

中日新聞社東京本社論説室論説主幹

豊田 洋一

TBSテレビ報道局長
日本テレビ放送網取締役執行役員（兼）報道局解説委員長

荒井麻理子

テレビ朝日取締役報道局長
フジテレビジョン常務執行役員

伊佐治 健

日本新聞協会専務理事・事務局長

堀木 卓也

日本民間放送連盟専務理事
理事長兼読売新聞グループ本社代表取締役会長・主筆・国際担当（The Japan News主筆）

老川 祥一

副理事長兼共同通信社常務理事・編集局長

有田 司

副理事長兼日本放送協理事務局長

原 聖樹

日本記者クラブ専務理事兼事務局長

江木 慎吾

佐々木隆広

朝日新聞社ゼネラルマネジャー補佐
毎日新聞社論説副委員長
読売新聞社編集局次長

山本 明彦

毎日新聞社編集局次長
日本経済新聞社編集特命担当

池澤 健一

共同通信社編集局次長
日本放送協会報道局総務部長

山口 雄心

TBSテレビ報道局報道番組グループ長
日本テレビ放送網報道局次長

黒岩 亜純

フジテレビジョン危機管理副委員長・上席解説委員
日本新聞協会事務局次長兼企画開発部長

中村 光宏

日本民間放送連盟事務局次長兼長兼番組部長

徳永 康彦

朝日新聞社オピニオン編集長代理

武井 忠司

朝日新聞社論説委員
朝日新聞社論説委員
毎日新聞社論説室専門編集委員

伊藤 宏

毎日新聞社論説委員
毎日新聞社特別編集委員
読売新聞社編集委員

行方 史郎

読売新聞社調査研究本部主任研究員
日本経済新聞社上級論説委員

佐藤 千矢子

毎日新聞社論説委員
毎日新聞社論説副委員長
読売新聞社特別編集委員

澤田 克己

毎日新聞社論説委員
毎日新聞社特別編集委員
読売新聞社編集委員

永山 悦子

読売新聞社調査研究本部主任研究員
日本経済新聞社上級論説委員

橋本 五郎

読売新聞社特別編集委員
読売新聞社編集委員
日本経済新聞社上級論説委員

猪熊 律子

読売新聞社特別編集委員
読売新聞社編集委員
日本経済新聞社上級論説委員

大内 佐紀

読売新聞社特別編集委員
読売新聞社編集委員
日本経済新聞社上級論説委員

奥村茂三郎

読売新聞社特別編集委員
読売新聞社編集委員
日本経済新聞社上級論説委員

高橋 哲史

読売新聞社特別編集委員
読売新聞社編集委員
日本経済新聞社上級論説委員

辻本 浩子

編集委員
日本経済新聞社編集総合解説センター編集委員兼論説委員

乾 正人

産経新聞社特別記者（上席論説委員、コラムニスト）
産経新聞社論説委員兼論説委員

森田 景史

産経新聞社東京編集局総務共同通信社編集委員兼論説委員

吉村 英輝

産経新聞社東京編集局総務共同通信社編集委員兼論説委員

内田 恭司

共同通信社客員論説委員
時事通信社解説委員

杉田 弘毅

時事通信社解説委員
時事通信社総合メディア局編集委員

小林 伸年

中日新聞社東京本社論説室論説委員
中日新聞社東京本社代表付調査役兼編集委員

白石 徹

北海道新聞社東京編集局長兼論説委員
西日本新聞社論説委員（東京駐在）

早川由紀美

別編集委員
日本放送協会解説委員室解説主幹

森 奈津子

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

山口 英宏

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

宮内 正英

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

今井 純子

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

出川 展恒

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

山下 毅

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

岩田 夏弥

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

萩原 豊

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

小栗 泉

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

藤川みな代

日本放送協会解説委員室解説主幹
日本放送協会解説委員室解説主幹

立石 修

フジテレビジョン報道局長兼解説委員室室長
テレビ東京取材センター長兼経済部長

石原 淳子

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

尾崎真理子

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

滝 順一

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

成田 浩二

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

佐藤 圭一

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

勝田 洋人

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

堀口由多可

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

飯山 雅史

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

鴨下ひろみ

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

辻 篤子

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

塚越 裕爾

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

阿部 正人

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

小野 敦司

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

柳井 隆史

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

辻 唯志

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

高木 強

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

島田 敏男

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

施設運営委員会

◎塚越 裕爾

フジテレビジョン
時事通信社編集局専任局長
兼ニュースセンター長

阿部 正人

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

小野 敦司

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

柳井 隆史

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

辻 唯志

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

高木 強

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）

島田 敏男

読売新聞社出身（読売新聞社出身）
（日本経済新聞社出身）



新しい個人D会員



鴨下 ひろみ 1987年フジテレビジョン入社。外信部、政治部、香港、ソウル、北京の各特派員、報道局編集長兼報道センター室長、外信部長などを歴任し2022年退社。現在、甲南女子大学准教授。

女子大でSNS漬けの学生たちに、少しでも新聞やテレビの報道を知ってもらおうと悪戦苦闘中。信頼に足るメディアの存在を伝えたいです。



室田 康子 1980年朝日新聞社入社。西部本社社会部、朝日ジャーナル編集部、学芸部、朝日学生新聞社常務取締役などを歴任し2014年退社。退社後は大学で非常勤講師としてジャーナリズム論などを担当。

これからもテーマは、アンチ家父長制。細々とでも記事を書き、悲観しすぎずにジャーナリズムを考え続けたいと思っています。

個人D会員入会キャンペーンをやっています。詳細は事務局・杉本（電話03-3503-2727）までお問い合わせください。

会議報告

●第464回会報委員会（6.9 小会議室）

7月号の編集について協議した。

出席 榊原委員長、田中、森、高橋、成田、勝田、飯山、鴨下、辻の各委員。

●第562回企画委員会

（6.10 9階会場&オンライン）

参院選の党首討論会の開催方式を議論した後、今後のゲスト候補について意見交換した。

出席 菅野委員長、井田、伊藤、行方、澤田、橋本、大内、奥村、辻本、乾、森田、内田、杉田、中村、白石、早川、森、山口、宮内、今井、出川、山下、岩田、萩原、小栗、松木、立石、石原、尾崎、滝の各委員。

●第574回会員資格委員会（6.18 小会議室）

7月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 福島委員長、佐々木、松永、池澤、杉田、中村、中本、武井の各委員。

●第729回理事会（書面）

①下記の役員の一部交代に関する件、②会員の入退会（7月1日付）を承認した。

■理事交代

テレビ東京（新）八田亮一 取締役
（旧）吉次弘志氏

〈法人会員代表変更〉

- ・産経新聞社 近藤哲司 代表取締役社長
（旧 飯塚浩彦氏）
- ・報知新聞社 長谷川剛 代表取締役社長
（旧 依田裕彦氏）
- ・共同通信社 沢井俊光 社長・編集主幹
（旧 水谷亨氏）
- ・札幌テレビ放送 小山章司 代表取締役社長
（旧 井上健氏）
- ・名古屋テレビ放送 川端進 取締役
（旧 長典俊氏）



いまさらと思うかもしれないが、改めて言いたい。「トランプ大統領は危険だ！」

ロサンゼルス暴動に海兵隊が動員される映像や、自分の誕生日の軍事パレードに満悦している姿を見て、つくづく思った。大統領には、皇帝のようにはむき出しの力で意志を押し通す権利がある。それが彼の根底にある心理だろう。

合衆国憲法は、実は人間不信の塊だ。建国の父たちは、権力を手にした人間は必ず悪事を働くと考えた。議会と大統領はともに野望を持った怪物なので、双方が敵対するように仕向け「野望は野望によって対抗させる」（ジェームズ・マディソン）よう仕組んだ。

そもそも、連邦政府には貨幣鑄造や度量衡の制定、戦争の宣言など18項目の権限しかない。州政府が定める刑法や民法、宗教や教育には手出しができないのだ。権力をバラバラに分解して徹底的に皇帝権力の出現を阻もうとしたのが

憲法と皇帝権力の火花

合衆国憲法だ。

しかし、憲法は総則にすぎず、独裁化への抜け道はいくらでもある。独立初期にはジョージ・ワシントンを担いで王制樹立の陰謀もあった。現実に民主制の長い歴史を実現したのは、陰謀を拒否して2期で辞任の慣習を作ったワシントンのように、政治家と国民が民主制の美点に確信を持っていたからに他ならない。憲法に定めた抑制と均衡の制度だけでは、権力の暴走は防げないのである。

今、その確信が揺らいでいるのではない。貿易赤字や移民労働者の急増で「負け組」となった白人労働者階層には強い怒りがある。移民を乱暴に追い返せば支持が上がり、拍手喝采の中でトランプはナルシズムを満足させる。

トランプ時代をやり過ぎれば、4年後には米國政治がリセットされると信じる根拠もない。アメリカは何度も過ちを犯したが、民主主義の防衛と発展にその力は不可欠だ。そのアメリカが、危うい。

読売新聞社出身 飯山 雅史

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 七月お献立 (7/31まで)

先付前菜：生だこあぶり レモン挟み、柚子カステラなど 馬蹄杯：青梅甲州煮、ジュンサイ冷焼：枝豆すり流し 海老白玉など 造り：鮪重ね、鰹湯引き 揚げ物：花ズッキーニ、射込み叩き海老、にがうり衣揚げ 炊き合わせ：冬瓜鶏そぼろ、小芋、オクラなど 食事：鮎ぞうすい デザート：葛吉野笹盛り (5,500円) (板長：薫田勝) ※仕入れの都合で内容が変わることがあります。

洋食 季節のおすすめコース (7/31まで)

生ハムと無花果のサラダ仕立て、ビーツの冷製クリームスープ、牛フィレ肉のグリル グレイビーソース、ブルーベリーのレアチーズタルト、コーヒーまたは紅茶、パンとバター (4,400円)。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。 (シェフ：佐藤和治)

下野新聞社東京支社が移転

下野新聞社東京支社が下記へ移転しました。
〒105-0004 東京都港区新橋 4-7-2
6 東洋海事ビル 2 階B室 電話：03-5501-0520

8月お盆期間のお知らせ

施設の排水管工事に伴い、クラブ施設はお盆期間を含む8月9日(土)～16日(土)の間、閉室する予定です。9階和食レストラン、10階レストランも臨時休業いたします。18日(月)から通常通り開室します。

正式に決定しましたらクラブのウェブサイトでお知らせいたします。ご不便をおかけいたしますが、ご理解ください。

訃報

石川荘太郎会員(産経新聞社出身、85歳)が6月30日に死去されました。石川さんには1988年5月～97年5月まで企画委員を務めていただきました。ご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定 (7/2現在)

17㊦	14：00～15：30 9階会場 「戦後80年を問う」⑭ 秦早穂子さん 映画評論家
	17：30～19：16 10階ホール 試写会「ウナイ 透明な闇 PFAS汚染に立ち向かう」
18㊦	15：00～16：30 10階ホール 「『コメ』はいつまで主食かー価格急騰を考える」⑧ 澁谷梨絵 シブヤ代表取締役、小池理雄 小池精米店代表
22㊦	11：00～12：30 9階会場 「中国で何が起きているのか」② 林載恒 青山学院大学教授

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) …… ☎3503-2723 ●会員事務 …… ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階) …… ☎3503-2766 ●経 理 …… ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ …… ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み …… ☎3503-2722
- 受 付 …… ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス …… kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：121社 ●基本会員：701人 ●個人会員：979人
- 法人・個人賛助会員：53社・112人 ●特別賛助会員：95人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：60人 計174社・1,959人



マイBOOKマイPR

■『虚構の六四天安門事件 中国共産党の不都合な真実に迫る』

加藤 青延(日本放送協会元解説主幹)

事件の「謎」探求の最終報告

36年前に発生した天安門事件。民主化を求める学生や市民を軍が武力で弾圧したこの事件は、世界に大きな衝撃を与えた。

だが当時、現場で一部始終取材した筆者にとって、確信をもって伝えられたのは、直接目撃できた事象ばかり。取材の過程で多くの疑問や謎に行き当たった。

事件の真相を解き明かせば、中国という国の根源が見えてくる。

本書は、事件の謎と実態の解明をその後のライフワークとしてきた筆者の継続取材の総まとめである。



PHP研究所
1,925円

■『転がる石のように 揺れるジャーナリズムと軌む表現の自由』 山田 健太(専修大学教授)

悪化する時代の流れを描く

表現の自由とジャーナリズムのありようは、2000年代に入って相次ぐ表現規制立法、15年頃からの政治的公正さを理由とした放送局への圧力や政治色がある作品展示の拒否といった付度の蔓延、20年以降のコロナ禍を理由とする自由や権利全体の縮減と、悪くなっているように思われます。前作『見張塔からずっと』『愚かな風』はそうした前2期の状況を、本書は3期目を描きます。いずれもボブ・ディランの詩からタイトルを付けましたが、この3部作で時代の流れをご理解いただけたと思います。



田畑書店
2,750円

山形新聞からさくらんぼ

山形新聞社の保科裕之取締役東京支社長がクラブを来訪。今年も名産のさくらんぼを寄贈してくれました。

ラウンジで会員の皆さんに召し上がっていただきました。「初夏のルビー」とも称される紅秀峰に「大きくて甘い。とってもおいしい」と大好評でした。



会報委員会

委員長＝榊原 智
委員＝飯山 雅史 勝田 洋人 鴨下ひろみ
佐藤 圭一 高橋 清子 田中 成之
辻 篤子 成田 浩二 堀口由多可
森 一徳

(事務局：西村志織 本庄五月)

☎03-3503-2729 FAX 03-3503-7271

撮影：喜屋武 真之介 (毎日新聞社写真映像報道部兼那覇支局)



前田高地にある巨大な石灰岩石は「ワカリジー」と呼ばれ、地元住民の祈りの場所となっている。米軍は「ニードル・ロック」と呼んで目標地点とし、日米両軍の激しい争奪戦が繰り広げられたという＝4月29日、沖縄県浦添市

狭間に響く戦闘機の爆音

辺境は損をする。遠く離れた都に思いは伝わらない。懸命な訴えも関心の外。そうこうするうちに「国家意思の貫徹」という名の一方通行が始まる。曰く「地理的にそこにあるんだから仕方がない」「外交・防衛は国の専権事項である」。果ては「あんたたちはわがままだ」。

無理が通れば道理が引つ込む――。そんなことを考えながらF22戦闘機の離陸を眺めていた。最近では兄貴分のF15に替わり大きな顔をして南の空を飛び回っている。

ただ、「サンパウロ広場」と呼ばれた丘の上で鋭利な機影を追っていた昔も、展望台完備の「道の駅」からステルス性に長けた新鋭を一望する今も、星条旗翻るこの基地が極東最大と形容されるほど巨大であることに変わりはない。

「わたしたちの社会的／個人的意識の裏側には、『帝国の狭間』の人々の犠牲を当然視するような思考が拭いがたく張り付いており、それを自覚することすら今日の日本社会においては困難になっている」(駒込武編『台湾と沖縄 帝国の狭間からの問い』)

80年前の地上戦では友軍の存在が住民の生死を分けた。前田高地のみならず嘉数高台やシュガーローフなどなど。守ってくれたのではない。投降を許さず戦闘に巻き込む。時には虐殺も。住民の死傷率は友軍が展開していたエリアで著しく高い。人々は悟った。「軍隊は住民を守らない」と。それなのに「現代の友軍」はデーンと居座り、政治家は戦世の伝承を「歴史の書き換え」と断じた。

F22がもう1機走り出した。滑走路は強烈な日差しに溶けそう。力の誇示をやめぬ隣国にいらつきながらも、リビジオニズムと結びついた脅威論には騙されまいとささやかに決意し、アフターバーナー全開の爆音を聞く。

(時事通信社出身 軽部 謙介)